愛の言霊～THE STYX～

尖角?

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
愛の言霊～ＴＨＥ　ＳＴＹＸ～

【Ｎコード】
Ｎ１２７６Ｕ

【作者名】
尖角？

【あらすじ】
さとる・ほたる・つよし・あいりの４人で構成されるストーリー。
さとるはほたるを護るために誰かもわからない敵に立ち向かう。
ほたるは好きな人の傍で恐怖に怯え事件を見守る。
つよしは逆恨みから始まり多くの悪に手を染める。
あいりは兄のつよしを想い自ら悪の道を進む。
そんな４人が絡みに絡むストーリー。

始まりの時（前書き）

昔書いていた小説です。

少し日本語を訂正して掲載していますが、

まだまだおかしいところがあります。どうぞ！！

始まりの時

8月18日　木曜日

「ふぎゃぁー」

ある暗い部屋の中、その声は谺(こだま)した。

ここにたった今、新たな生命(いのち)が芽吹(めぶ)いたのだ。

その後、オレは温かい母のぬくもりを感じながら静かに眠りについた。

1才の誕生日、

オヤジと2人、ムサイ誕生会をやった。

ちなみに、オフクロはオレを産んだ1週間後に死んでいる。

2才の誕生日、

昨年とまったく同じだった。

３才の誕生日、

これも昨年と同じだった。

４才の誕生日、

今年は違った。幼馴染が家に来てくれたのだ。

オレが言うのもなんだが、そいつはなかなかカワイイ。

そう、、、そこらの標準的なアイドルと比べれば、絶対カワイイと自負していた。

５才の誕生日、

ここから約９年は幼馴染のほたるが家に来ていた。

だが、最後に来たのはいつの日だっただろうか？、、、

覚えていない。そんな過去のことは忘れてしまった。

いいや、思い出したくないだけだった。

いつの日か、あのころのように2人、ケンカ別れする前のあの頃のように笑いあえたら…。

そんなムダなことを、オレは今でも思っている。

11月18日、現在、、、

オレは夜道を歩いていた。

満月がオレを照らす中、オレは不意に立ち止まり、ただ一言ぽつりと呟(つぶ)いた。

“何かオモシロイことないかな”　っと…。

オレは後(のち)にこの言葉を後悔することになる。

始まりの時（後書き）

今回はプロローグなので、２話連続ということで！！

少女との出会い（前書き）

プロローグに続き、本編です。
ではどうぞ！！！

少女との出会い

１１月１９日、０時３２分、、、

オレはコンビニで漫画を立ち読みしていた。

その漫画に出てくる女が妙に“あいつ”とだぶった。

本当は、こんな所に長くいるつもりはなかったのだが…。

１時頃、、、

オレは家に向かっていた。帰ったところで誰もいない静かな家だが、もう今日は疲れた…。

『帰って寝よう』　俺の心がそう訴えるので、オレは足取りを速め信号を渡った。

…それから5分後のことである。

俺：「いてっ！」「テメーどこみて歩いてやがる！！」

？：「・・・・」

ぶつかってきた奴は腰のあたりまで髪を伸ばした少女で、正直かわいいと思った。

？：「ごめんなさい」

その少女は一言つぶやいただけで、オレの視界から消えて行った。

その後、気付いたのはベッドの上だった。

なぜここにいるのか、どうやってここにたどり着いたのか？

オレは少し不思議に思ったが、かなり疲れていたのでそのまま寝ることにした。

あれから、どれくらいたったのだろうか？　…わからない。

それはわからないが、何を夢で見たかははっきり覚えていた。

オレは夢で少女に出会った…。

どこかもわからない所をオレは必死に必死に何かから逃げていた…。

すると間もなく、オレの目の前に一筋の光が現れた。

だから、オレは何の躊躇(ちゅうちょ)もなくその光があるところまで走った。

しかし、どれだけ必死にもがいても、その光に近づくとすらできなかった。

そんな状況から、オレは走るのをあきらめかけていた。

その時である。

光からスルスルと、一本の手が手が伸びてきた。

オレはその手をまるですがるように握り、光の中に入っていった。

すると、そこは何もない広い広い空間で、一人の少女がポツリと立っていた。

少女との出会い（後書き）

愛の言霊はサザンの曲です。
なんだか好きです。Ｍステ見て好きになりました。

夢の中から（前書き）

夢ですか…。
夢ではないですが、寝違えました。

夢の中から

少女は夢の中で言った。「私の名前は“アイリ”」「この前はごめんなさい」

「私、あのときは慌てていたから、まともに謝りもせず・・・」

そんな少女の言葉を聞いて、オレは言った。

「気にしないでくれ、あんな時間だったんだし、気を付けてなかったのはお互い様だからさぁ・・・」っと。

その“アイリ”と名乗った少女は、オレがぶつかった少女と瓜二つだった。

しかし、ぶつかった少女はが着ていた服は真っ白のワンピースであり、“アイリ”と名乗った少女は真っ黒なワンピースだった。

オレはその服の違いに少しの違和感を覚えたが、話が弾むにつれ、その違和感もだんだんと薄れていった。

「ポーン、、、」

なんだ?この音は…。オレは不思議に思ったが、アイリとの話があまりにも楽しいので話を続けていた。

いやっ、続けるつもりだった。

その「ピンポーン」という、何度も鳴るけたたましいチャイム音でオレは目覚めてしまった。

俺：「なんなんだよこんな時に！！」　そういって時計を見る。

ただいまの時刻は1時２８分、、、

『な！もう昼かよ！！』

そんなことを思うオレに追い打ちをかけるかのように玄関から声がした。

？：「集金に来ました～！」

『はぁ…めんどくせぇ…』　オレはそう思いながら玄関を開けた。

“ガチャ”　玄関を開けるとそこには懐かしい顔があった。

？：「久しぶり・・・」「覚えてる？あたしのこと・・・？」

俺：「あっ、あぁ」「忘れるわけないだろ？」

…まさかこいつが訪ねてくるとは思わなかった。

そんな思いを察したのか、

？：「なによ・・・つれないわね・・・」「あがっていい？」 っと言う、オレの幼馴染。

そんな幼馴染にオレは少しぎこちなく「あぁ」と答える。

『こいつが家に来たのは何年ぶりだろうか？』、、、

そんなことをオレは考えながら幼馴染を部屋に招き入れた。

夢の中から（後書き）

私の部屋は立ち入り厳禁です（笑）

栗色の髪（前書き）

幼馴染の定義がいまいちです（笑）

栗色の髪

しかし、しばらくの間、部屋にいたどちらも口を開くことはなかった。

ただただ黙って見つめ合い、時間だけが過ぎて行く、、、

そんな沈黙を最初に破ったのはほたるの方だった。

ほ：「ごめんね？」「急にさ…」

：「あれから“謝りたい”って何度も思ったんだよ？」

：「でもなかなか話せずにいて…」「本トにごめんね…」

：「あの時は…いやっ、あの時じゃなくてもケンカして悪かったのはいつもあたし…」

：「でも、そんなあたしをあんたは…さとるはいつもかばってくれたよね…」

：「どんな時でもあたしを想って謝ってくれたよね…」

：「けど、そんなさとるの態度に気付かないでバカみたいに振る舞って…」

：「いつも…いつもさとるわぁ～」

ここでほたるはオレに泣き付いてきた。

オレはそんなほたるの肩をそっと寄せて、綺麗（きれい）な栗色をした髪を撫（な）でた。

それからしばらく部屋には泣き声だけが響いていた。

俺：「ありがとう」「そして、やっぱりごめん」
：「昔さ、、、オマエを泣かせないって約束したこと覚えてるか？」

ほ：「ううん…覚えてない…」
：「けど、さとるは優しいから、きっとそう言ってくれたんだと思う」
：「あたしは好きだよ…さとるのこと」

オレの脳にその言葉はしつこい油のようにこびりついた。

オレはオレの中で高ぶる感情を必死にこらえ、話を変えるためにオレは言った。

俺：「ところで…ところでオマエは何しに来たんだ？」

その言葉を聞いたほたるは一瞬何とも言えない表情をして、オレの質問に答えた。

ほ：「実は…どこから話せばいいのかわからないんだけど、単刀直入に言うなら命を狙われているの…あたし…」

俺：「えっ？」

そう、オレはただ漠然と一言だけ発した。

そして『こいつ気でも狂ったか？』っと思った。

そう思うしかなかった。

だって命を…って受け狙いなのか？

そんなことを思っている矢先である。

ほ：「その目…信じてないよね…？」

：「さとるなら…さとるなら信じてくれると思ったのに…」

『――――――。』

どうやらほたるは本気（マジ）で言っているらしい。

だからオレは、それから日が落ちるまでの時間、ほたるの話を聞き続けた。

話が終わり、オレは席を立った。

そして部屋にカップ麺と冷凍食品のから揚げを食べれる状態で持ってきた。

俺：「まぁこんなのしかないけど食えよ…」

ほ：「ありがとう」「本トにありがとう」　潤（うる）む目がやけに可愛かった。

オレはそんなことを思いながらから揚げを1つ取って話し始めた。

俺：「結局、オマエはある少女に命を狙われているってことだよな？」

ほ：「うん…そういうこと…」

：「でも本トに女の子かどうかはわかんないけど…」

俺：「そうだよな…」

：「少女（そいつ）とは電話で話しただけで、声を変えられてたら誰かわかんねぇもんな」

オレはそう言いながら『昔、ほたるとのケンカで勝ったことは一度もなかったけど、今は普通の女の子なんだよなぁ…』っと思いに耽（ふけ）、ラーメンをすすった。

栗色の髪（後書き）

好きなラーメンは醤油と豚骨です。

少女の趣味（前書き）

趣味ですか…
そうですね…
曲聞くこととか、小説を読んだり書いたりすることですかね。

少女の趣味

しばらくラーメンの音だけが続いた後、例の電話のテープを聞いた。

そもそもなぜほたるがオレに相談してきたかというと、昔のオレは推理が得意だった。

別にオレ自身は推理が得意とか、そんなこと思っていなかったが、昔のオレは何から何まで推理しなくては気が済まなかった。

よく言う、「やめられない・とめられない」である。

そんなオレのところに、大好きなほたるが相談しに来てくれた…。

また昔みたいに、2人で笑って過ごしたい。

オレはなぜかそんなことを考えていた。

「次はあなただよ…」「わたしが殺してあげるから…」

テープから聞こえる可愛らしい声、、、

「おねーちゃんみたいに可愛くて魅力のある人を殺せるなんて、考えただけでゾクゾクしちゃうんだから…」

「そおだなぁ～」「かわいいおねえちゃんはぁー」

「は・く・せ・い」

「剥製にでもして、わたしのお部屋に飾ってあげる！」

「あはは！あはははは！！あはははははぁ～～～～～！！！」

・・・甲高(かんだか)い声がオレの耳を劈(つんざ)く。

ほたるは折れそうな声で聞いてきた。

ほ：「あたし剥製になっちゃうの？」　声がいつになく震えている。

俺：「されるわけないだろ？」　オレはそう言って安心させ、声の主の正体を記憶の中で辿(たど)っていった。

少女の趣味（後書き）

剥製…ね……

まだグロくはないですけど、後半グロくなります。

守る決意（前書き）

想う人は守りたいものですね（笑）

そんな作者です。ではどうぞ！！

守る決意

しかし、いくら記憶を探(さぐ)り直しても、その声は間違いなくワンピースの少女のものだった。

ありえない、、、あの少女が、、、

ありえない、、、

昔、死んだオヤジが言っていた。

「この世に『ありえない』なんてものは存在しない」っと…。

すべての出来事(ごと)はありえるということだ。

オヤジは探偵だった。

オヤジはオヤジが死ぬ1年ほど前に依頼してきた青年に殺された。

青年はオヤジにある相談をし、その内容が警察にバレ、捕まった。

オヤジは警察にも、誰にも言ってなかったらしい。

青年が人を殺したことを…。

それで、それを逆恨みした青年が脱獄し、オヤジを殺した。

このオレの目の前で…。

その後、まもなく青年は警察に捕まり死刑…。

オレは1人、孤独な人となった。

8才の誕生日…。

オレはほたると2人で祝い、

そして、泣いた。　涙が枯れるまで泣き続けた。

オレの誕生日で初めてオヤジの姿がなかった。

子供のオレにとってつらい出来事だった。

いやっ、オレ達と言うべきだろうか？

そして、今日もあの時のように2人きりである…。

けれど、前とは状況が全く違う。

だってまだ誰も死んでなんかいないから…。

なぜなら、守れる命がそこにはあった。

だからこそ、“守る決意”がオレの中で固まったのだ。

守る決意（後書き）

みなさんには守りたい人はいますか？

次話は、第二の視点です。

幼馴染の家の前で（前書き）

今回初めてわかります。
主人公の名前が「吉田さとる」ってことが…。
ちなみに、視点ごとが主人公なので、今回からは「ほたる」が主人公です（笑）

幼馴染の家の前で

私は今、幼馴染の家の前にいるが、その家の表札には“吉田”っと書いてある。

私は3年ほど前に幼馴染とケンカをした。

小学校も中学校も同じ学校だった、、、

しかし、中2の夏に私は引っ越しをした。

ケンカをした1ヵ月後のことである。

引っ越し先は、少し遠かったので違う学校に通うことにした。

だから、高校も違うと思っていた。

しかし、高校の入学式の次の日、私は校舎裏で幼馴染を見つける。

だが、幼馴染の隣には女の子がいた。

私と同じリボンの色、、、『同じ1年だ…』っと私は思った。

けれども、その女の子は泣いていた。

『女の子が校舎裏で、男の子の前で泣いているってことは、、、告白ってことかな??』

私は勝手にそう想像した。

私は正直、さとるが好きだ。

だからこそ、さとるがＯＫを出したのかが気になった。

そして、入学式の次の日の告白ってことも気になっていた…。

だが、この時の私は知らなかった。

知るはずもなかった。

この１年後、さとるの家に行くことなんて…。

幼馴染の家の前で（後書き）

校舎裏での告白なんてあるのでしょうか？
私にはまったくわかりません。

幼馴染の家の中に（前書き）

前から中に入ります。
そんな一話です。どうぞ！！

幼馴染の家の中に

１１月９日、１３時２７分、、、

“ピンポーン”

私はチャイムを１度鳴らした。

しかし、出ない…。いや、出てくれない。

どこかに出かけてるのかな？

希望を忘れず、もう一度…。

“ピンポーン”

ただ、家の中に虚(むな)しく広がるだけ…。

勇気を出して「集金に来ました！！」っと口に出す。

すると、“ガチャ”っと玄関が開いた。

『やったー！！』　口に出して叫びたかったが、意地と根性で無理やり抑え込んだ。

そして私は「久しぶり…」「覚えてる？私のこと…」っとふてくされたように言った。

「あっあぁ…」　っと何とも微妙な声で答えるさとる。

それに続いて「何よ！つれないわね！！」っと本音を一言…。

それから「あがっていい？」っと私は聞いた。

しかし、さとるは「あぁ…」っとこれまた微妙な声で答えただけだった。

ドクン　ドクン　ドクン――――――。

階段を上がり、さとるの部屋にゆっくりと向かう。

そんな中で、私の心臓のドキドキがバクバクに変わっていくのがわかる。

一歩、また一歩と近づくたびに、私は映画の音響（おんきょう）みたく大きくなった。

“ギギィ・・・”

扉が開く音…それが私には小さく聞こえる。

さとるの部屋はどんな部屋なのだろうか？

殺風景で何もない部屋なのだろうか？

それとも足の踏み場がないぐらい汚い部屋なのだろうか？

私はそんなことを考えながら、さとるに続き部屋に入った。

部屋はキレイに片づけられていて、どっちかっていうと殺風景の部屋だった。

一人暮らしの男の子なんだから、エッチなポスターの1つや2つは壁に貼ってあるかと思っていた。

しかしそんなものは1枚も見当たらず、私の期待？とは全然違った…。

それから私たちは少しの間、見つめ合っていた。

そして、私はこうしていられるだけで幸せだと思った。

『あぁ…あの件がなければなぁー』

私はそんなことを思っていた。

しかし、そんな幸せをずっと感じるわけにはいかなかった。

私はさとるにお願いに来たのだ…。

事件解決の手伝いについての…。

幼馴染の家の中に（後書き）

私の部屋は汚いです（笑）
殺風景ではありません＾＾

私の告白（前書き）

ほたるの告白です。
見守ってやってください（笑）

私の告白

私は話を切り出すために、まずはあのことを謝った。

「ごめんね？急にさぁ…」「あれから謝りたいって何度も何度も思ったんだけどなかなか話せずにいて…」

「本当にごめん」「あの時は…いやっ、いつもケンカして悪かったのはあたし…」

思いもしなかったのだが、私はここで泣いてしまった。

そして、テンパっていたためか、ここから先何を言ったのか覚えていない。

だが、ただただ謝り続けた私の髪を、さとるが優しく撫(な)でてくれたことは覚えている。

“あぁ、うれしい”　私の中でそんな思いが生まれた。

その後さとるは「ありがとう」「そしてやっぱりごめん」

「昔さ、お前を泣かせないって約束したの覚えてるか？」っと聞く…。

いつ言ってくれたのだろうか？　私は考えた。

だが、答えなど出なかった。

だから私は「わかんない」っと本当のことを言って涙を拭った。

そして、「けど、さとるは優しいからそう言ってくれたんだと思う」

「私は好きだよ…さとるのこと…」っと言った。

――――――――――――――――――

――――――――――――――

―――――――――

しまった！！

かっ、勝手に口が動いてしまった。

『ばか！馬鹿！バカ！』　私は心の中で叫んだ。

あぁ…嫌われちゃったらどうしよう…。

そして私は思った。

『私、今、顔、絶対、赤い！！』

っと…。

『はぁ、、、』

『嫌われちゃったらどうしよう…。』

私は次にこう思った。

しかし、そんな風にテンパる私にさとるは言った。

「ところでお前は何をしに？」　っと…。

思わぬ言葉に口が“ポカン”と開くかと思った。

『あぁ…』

『私振られたんだ…』

私はそう思った。辛かった。

私の告白に触れることなく話をすり替えたことが…。

私の告白（後書き）

失敗です。
両想いなのにね（笑）

「俺が守る」その言葉…（前書き）

好きな人ぐらいは自分の手で守りたいです^^

「俺が守る」その言葉…

だが、今日来た目的は告白などではない。

私は気持ちを切り替え、命が狙われていること話した。

しかし、さとるは一瞬、私の話を「えっ？」っと信じてくれなかった。

けれど、最後まで話を聞くことで、納得し、信じてくれた。

そう、、、警察も信じなかった話を…。

それから、さとるは席を立ち、部屋にカップラーメンとから揚げを持って帰ってきた。

そして「まぁ、こんなもんしかねぇけど食えよ！」っとさとるは言った。

私には十分だった。

カップラーメンの温かさが、私の心を癒してくれそうで…。

「ありがとう」「本当にありがとう」

私はさとるが相談に乗ってくれただけで嬉しかった。

次に私は、私の命を狙う少女の声を聴いてもらった。

テープの最後に残る、甲高(かんだか)い笑い声が部屋中に響(ひび)き渡り、私というものを寒気で覆(おお)った。

私は少し震えながら「私剥製になっちゃうの？」っと言った。

そして、そんな私の言葉を聞き、さとるは少し大きな声で「なるわけないだろ！」反論し、考える素振りを私に見せた。

だがすぐに、「お前は俺が守る」と私の瞳(め)を見つめて言う。

嬉しかった。大好きなさとるに言ってもらえたから…。

私は振られた身でありながら、そんなことを考えていた。

「俺が守る」その言葉…（後書き）

振られたところで想いは消えないものです（笑）

ビンタを一発！！（前書き）

第三の視点です　どうぞ！！

ビンタを一発！！

「畜生！畜生！畜生！なぜばれた！！」　街の中で叫ぶ男が一人いた。

5月17日、23時48分、、、

月明かりだけで街中を全力で駆ける。

時々後ろを向いて追手がいないかを確認する。

物陰に隠れて耳を澄ます。

足音は聞こえない…。

『よし！』　心の中でそう言ってまた走る。

男はずっと頭で考えていた。

『なぜ事件の真相がばれたのか？』

しかし、どれだけ頭で考えても結果は同じだった。

『奴がばらしたんだ…』

男はそう考えた。

自分の計画は完璧だ！俺はそう自負していた。

そして、計画のことは俺と奴しか知らない。

『だから計画をばらしたのは奴だ』

そう男は考え、言った。

『何がプライバシーの保護だ！！ふざけんな！！！』っと…。

すると、その声が聞こえたわけでもないのに、一気に足音が大きく近づいてきた。

「いたぞ！！星は向こうにいる！！」

足音の方から聞こえる大きな声…。

男はここで気付く。

『自分が馬鹿だったと――――、、、』

そう思い、自分の顔にビンタを一発。

“パシッ”　この音が建物と建物の間で共鳴した。

ビンタを一発！！（後書き）

後書き　自分の顔にビンタしたことのある人はいますでしょうか？
ちなみに私はありますよ＞（、^,）＜

男の決意と心の穴（前書き）

私の心に決めたことは
“想う人を泣かせない”
ですかね（＾＾♪ｗｗｗ

ではではどうぞ！！

男の決意と心の穴

5月18日、1時23分、、、

警察に男は囲まれて、逃げることもできず、足元に落ちていたパイプを拾う。

「畜生！覚えてろよ！！」

「絶対に…絶対に脱獄して殺してやる！」

男は誓った…。

神に？いやっ、自分に…。

自分を見捨てた神はもう信じない。

男はそう思いながら、パイプを引きずって警察に一歩、また一歩と近づく。

警察を見た瞬間、男は走りだし、パイプを大きく振りかざす。

“バン”っとパイプを持った男に、一人の警察官が発砲する。

“ジワリ”と服に血が滲(にじ)む。パイプの落ちる音と共に男の倒れる音がした。

撃たれた瞬間、腰を押さえる男…。

それと同時に「うぅっ」っと呻(うめ)く声がする。

そして男は闇に中に目を閉じる。

聞こえるのは「1時41分」と時刻を読み上げる声…。

とうとう男は捕まったのだ。

そして男が目を覚ますのは、これから2日後のことだった。

目を覚ましたのは、ベッドの上…。独房の中だった。

まだ撃たれた腰が痛くてまともに歩けない。

“ちくしょう”ただその一言が頭に中にこびり付く。

「コツコツコツ」と革靴が地面を叩く音…。

看守は俺の部屋の前で立ち止まり、俺に向かって一言放つ。

「やっと起きたか…人殺し…」っと――――――

“人殺し”　この声が俺の心で谺(こだま)した。

何も言い返せない。事実だから…。

そしてこの時、俺の胸に“ポツリ”と穴が開いた。

男の決意と心の穴（後書き）

私は心が折れやすいタイプです。

だから、友達を友達と認めるのに時間がかかります（笑）

そうですね…

最近だと3年間一緒にいてやっと友達だと認めることにしましたよ

^^

現在私が友達だと思っているのは3人。

私以外がどう思っているかは知りません。

ただ私は人から嫌われてもいるけれど、好かれてもいます。

囚人にできたチャンス（前書き）

最近チャンスだと思ったことは…

――――――

――――――――――――

――――――――――――――――――――

ない…ですね……

囚人にできたチャンス

俺は女子高生連続殺人犯として全国に名を馳(は)せていた。

俺が殺したのは6人…。死刑かと思っていた。

だが、それでもいいと思った。

奴に仕返しができないのは嫌だったが、仕方がないことだと思ったから…。

いやっ、仕方がないことだと思っていたから…。

なぜなら、俺にはチャンスができた。

それを思い、俺は『馬鹿め…』と心の中でつぶやく。

なぜ俺がそう思えたか、、、

それは『生きて償え』と裁判で決まったからである。

俺は女を6人殺した。

けれども死刑にはならず、無期懲役となった。

これはチャンス以外の何物でもない。

『これで奴に復讐できる』

俺はそう思った。

捕まってからちょうど1年が過ぎる頃、

世間が俺という人間を忘れ始めた頃……

俺は脱獄を試みることにした。

まず休憩時間に外に出て、何処(どこ)かに逃げる場所がないかと探した。

しかし、どれだけ探したところで全然見つからない。

けれど、１つわかったことがあった。

それは看守の交代の時間…。

毎日、６時・１２時・１８時・２４時と６時間周期で交代し、

そして最低でも交代に１０分はかかるということがわかった。

これを使わない手はない…。

だから、俺はこれをベースに脱獄計画を進めることにした。

囚人にできたチャンス（後書き）

人を6人殺して死刑にならないことはめったにないことだと思います。
けれど、そこら辺は気にせずに読んでやってください。

独房の中にて（前書き）

刑務所のことは詳しく知りません。
だからあまり突っ込まないでいただきたい（笑）

独房の中にて

刑務所の中での俺の作業は、ミシンの組み立てであった。

俺はそこでミシン針を一本くすねる。

理由は簡単。

独房では手錠をかけられる。

だから、脱獄をするためにはその鍵を解く必要があるのだ。

俺は来る日も来る日も看守の目を盗んではピッキングの練習をした。

するとある日、初めは開く気配すれなかった手錠の鍵が“カチッ”っと音を発てて開いたのだ。

しかし、たまたまということもある。

だから、俺は何回も何回もスムーズに開くまで同じ作業を繰り返した。

それが順調にいくようになって、次に俺は逃げる場所を探すことにした。

するとである。

独房にある洗面所の後ろの壁は脆(もろ)く、その壁の向こうには人が1人通れる隙間があるということを発見した。

これを使わない手はない。

俺はそう思い、壁を少しずつ削ることにした。

手順はこうだ。

まず、洗面台と壁をつなぐネジを外す。

そしてそれが外れたら、看守に気付かれないように洗面台を退(ど)かす。

次に洗面台の蛇口へとつながるホースが壁から出ているので、そこから徐々に穴を広げていく。

もちろん、1日でできる作業ではないので、洗面台を戻して→退かして→穴をあけて→戻して→・・・を繰り返した。

それを何日か続けると、ギリギリ俺の体が通れる隙間ができた。

そう、、、

脱獄の準備は確実に進んでいるのだ。

独房の中にて（後書き）

短いですね（笑）

独房からの脱獄（前書き）

脱獄なんてできない！！
そう思う方…
現実と理想は違うのですよ。

独房からの脱獄

俺が捕まってからちょうど1年が経った今日、俺は脱獄することにした。

5月18日、0時3分、、、

俺はまず始めに、洗面台を退かして穴の中に入る。

そして穴を潜(くぐ)り抜けると、そこには薄暗い通路があり、足元にある非常灯の光だけが俺を照らす。

それが俺にとって唯一の光であり、それが俺にとって唯一の生命線だった。

俺は光(それ)を辿り、数十メートル歩き続けた。

すると腰を低くしてやっと通れるぐらいの扉が現れる。

俺がその扉の取っ手をゆっくりと回すと、鍵は開いていて中に入ることができた。

そこはどうやら倉庫らしく、いろいろなものが置いてある。

俺はその中にあった備品から、あるものをくすねた。

・・・ナイフを3本である。

すると、どうにもいいタイミングで“ウゥー”っとサイレンが鳴り響く。

俺はもう少し《もつ》かと思っていたが、人生はそううまくはできていないらしい。

だから、俺は慌てて倉庫の出口に向かった。

するとである。

俺が出口に差し掛かった頃、

「緊急速報！緊急速報！！」

「２０３号室、本田剛が独房から脱獄した」

「本館の裏通路から逃げた模様…」

「これは訓練ではない」

「繰り返す、これは訓練ではない」っと放送が流れる。

『くっそ…』　俺は正直焦った。

だが、刑務所を囲むフェンスとの間に扉が1枚あるものの、フェンスまでは数１０ｍしかない。

そう、、、

俺の目の前に“脱獄”という2文字は見えているのだ。

だからこんなとこで負けるわけにはいかない。

そう思い、心の中でつぶやいた。

『フェンスには電流が流れているが、これを越えれば俺の勝ちだ』

っと――――――

独房からの脱獄（後書き）

フェンスの電流については突っ込まないで（笑）

電流の流れるフェンス（前書き）

脱獄まであと少し！！

電流の流れるフェンス

出口まであと１０ｍというところで、鉄製の扉で見えてきた。

そして、俺はそこに近づいて扉を開け外に出る。

さらに俺は、電流の流れるフェンス対策としてポケットの中に入れたミシン組み立て用の油を取り出す。

これは電流の流れるフェンスにかけることでショートすると昔聞いたことがあるので実践してみようと思ったからだ。

これが本当ならば俺は脱獄できる。

これが事実でないとすれば俺はもう一度捕まりお釈迦様となる…。

俺の未来は２つに１つ…。

俺はそんなことを考えながら、フェンスに油をかけた。

“バチッバチッ”っと大きくショートする音がした。

だから、俺は迷わずフェンスに体当たりした。

だが1回では壊れない。

壊れる気配もしない。

俺はもう一度体重をかけて体当たりする。

すると、撃たれた傷が“ズキン!!”っと悲鳴を上げる。

『くっそ!こんなところで…』と思い俺は歯を食いしばりもう一度体当たりした。

すると、それと同時にフェンスが壊れ俺は外に出ることができた。

追手はすぐ傍で「手を挙げてそこに伏せろ!」っと叫び散らす。

『誰がここまで来て手を挙げて伏せる?』

俺は心の中で嘲笑(あざわら)い、にやりと笑った。

電流の流れるフェンス（後書き）

なかなか今回の主人公、性格が悪いと思います（笑）

脱獄成功！！（前書き）

脱獄なんてできない…。

そう思った方！！実践してみては？

脱獄成功！！

俺がニヤリと笑った直後、後ろで爆発音がした。

それは銃声…。

また撃たれると思った。

だが、俺は何と運のいいことか！？

その時俺は足元の石に躓(つまず)いた…。

そう俺は助かったのだ。

しかし、そう笑ってもいられなかった。

なぜなら、どんどん加速して近づく地面…。

肩をかすめる弾丸。

裂ける囚人服。

俺はやっとのことで、地面に両手をついて体重を立て直した。

しかし、追手は続く…。

俺は必死にもがき走る…。

俺は死ぬ気でもがき走る…。

苦しいなんて言ってられなかった。

しかし、その苦しみの先に栄光はあった。

そう、、、

俺は脱獄に成功したのだ。

俺は勝ったのだ。

しかし、まだ油断はできなかった。

追手が近くにいるのは確かだし、自分の家もマークされている中、動ける範囲が選択される。

だから、俺は道端で出会った俺と同じぐらいの年で、俺と同じぐらいの体型をした奴に殴り掛かった。

すると、そいつはいかにも弱虫そうな声で「うわぁ」と一言放ち、気を失った。

俺は囚人服を脱いで、そいつの着ていた服を奪い着替える。

そして、金は無いかとポケットを漁ると財布があったので、俺は腹を満たすことを決める。

財布の中には１万５００円入っていて、目の前にはファミレスがあった。

もう、ファミレスに入る以外の選択の余地があるだろうか？

いいや、ありはしない。

そう思い、俺はファミレスに入りハンバーグ定食を頼む。

『うまい！！なんとハンバーグはこんなにうまいのか！！』

そう言った想いが、ハンバーグを食べると爆発してきた。

なぜなら、俺はここ最近、刑務所での不味い飯しか食べてなかった。

だからである。

だから、俺はハンバーグのおいしさに改めて感動した。

脱獄成功！！（後書き）

実践してみては？
っと言う言葉を聞き、本当にやったとしても、私のせいにはしないでもらいたい。

今日は七夕。
星にでも願ってください。『脱獄できますように』っと…。

バスと地下鉄に揺られて…（前書き）

バスは嫌いです
そして地下鉄も…。

バスと地下鉄に揺られて…

ハンバーグにがっついた後、俺は自分の右側にあった時計を見る。

時刻は7時２４分…。

今日という日は始まったばかり、、、

今日という日は十分に残っている。

俺は復讐のために立ち上がり、店を出た。

店を出てまず始めに、俺はバス停を探した。

なぜなら、奴の所まではなかなか時間がかかる。

そのための移動手段が俺には公共交通機関しかなかった。

ただそれだけだった。

しかしである。

バス停がなかなか見つからない。

俺のいた刑務所はかなりの田舎にあったため、探しても探しても見つからなかった。

だが、運命というやつが俺に傾いたのか？

それとも、幸運の女神とやらが微笑んだのか？

そんなことはわからないが、とにかくファミレスから3ｋｍほど行ったところでバス停を見つけた。

そして、俺は時刻表を見て１５分後にバスが来ることを知る。

『なんと素晴らしい事か！！』

田舎のバスなんてそれこそ、１時間や2時間に1本というイメージがあったのだが、奇跡に近い待ち時間に俺は出会えた。

しばらくして、俺はバスに乗る。

その時、バス内の時計は8時３９分を指し示していた。

俺の体は、砂利道（じゃりみち）になっている道路に合わせて“ガタゴト”と揺れる。

その間、俺は地下鉄を使い、どうやって奴の所まで行くかを考える。

奴の所に行くには、５つ行ったところのバスを降り、そこで地下鉄に乗り４つ行ったところで乗り換え、右回りで５つ行かなければならなかった。

意外と遠い…。

俺はそんなことを思いながら、バスを降り切符を買い、再びレールに“ガタゴト”と揺られた。

バスと地下鉄に揺られて…（後書き）

私は狭いところと1人が嫌いです。

自分を憐れむ独りの男（前書き）

自分は一人ぼっち…。
そう思う事がたまにあります。

自分を憐れむ独りの男

俺は事件について…。

そして、奴について…。

そして、捕まったことについて考えた。

しかし、考えても考えても“イライラ”募るばかりだった。

なぜなら、俺は二重人格者であったから…。

人を殺したのは、普段の俺ではなく、もう1人の俺…。

女子高生連続殺人事件の犯人は、俺ではないのだ。

今の俺は、、、

普段の俺は、急に気を失い突然目を覚ますと、目の前に人が死んでいる。

そんなかわいそうな俺を誰が責めることができようか？

そう思っていた。

しかし世の中はそんなに甘くはなく、俺を見捨て蔑(さげす)んだ。

そうなったのは全て奴のせい。

俺はそう考えた。

…でなければ誰を責めればいいのだ？

目に見えないもう1人の俺か？

それともかわいそうな俺自身か？

そんなことは、俺にはできなかった。

奴はプライバシーの保護とかいうやつを無視して警察に話した。

それが奴にとっての全てであり、俺はそれが気に入らない。

この俺も、もう1人の人格(おれ)の被害者なのに…。

自分を憐れむ独りの男（後書き）

次回から第一の視点に戻ります。

信じるという事（前書き）

久々の更新ですね^^

信じるという事

オヤジが最後に言った2つの言葉(ことば)をオレは思い出していた。

まず、1つ目の言葉は「たとえこいつが悪いと思っても、そいつのことを決して恨むな・憎むな・自分が憎悪に飲まれたら負けだ」である。

そして、2つ目の言葉は「すべてを疑え、ありえないなんてことはありえない、絶対と言う奴には裏がある」というものだった。

この2つの言葉は、オレにとって形見としか言いようがないものだった。

なぜなら、元来オヤジは物を残すのが嫌いな人であったから。

使ったものはすぐに捨てる。　いらないと思ったものは残しておかない。

これがオヤジの考えだった。

オヤジの考えがなんでも正しいと思っていた昔、オレは馬鹿みたいに人を信じて裏切られた。

けれど、それを今まで悔いたことは一度もない。

人を信じることは今でも良い事だと思っているから…。

時を遡ること数年前、、、

小学校の帰り道、オレは２０歳ぐらいの男に声をかけられた。

？：「あの…ちょっといい？」

：「君って、吉田探偵事務所のところの子だよね？」

：「僕の名前はほんだ…本田剛って言うんだけど…」

：「君の名前は？」

俺：「そうだよ？」

：「えぇ…っと名前は、吉田さとるだよ？」

本：「そうか、さとる君」

：「この前、僕は君のお父さんのところに相談しに行ったんだよ！」

そんなことを言いながら、“本田剛”と名乗る男はオレに歩み寄ってきた。

しかし、ここで問題があった。

昔のオレは馬鹿でどうしようもない奴だったのだ。

確かに、今も馬鹿ではある。

しかし、今のそれとは比べようのない大馬鹿者であったのだ。

誰かに話しかけられたりすると、その人のところに付いて行ってしまうような、、、

知らない人にアメを貰ってしまう代表例と言っても良いかもしれない大馬鹿者っぷりであった。

信じるという事（後書き）

しばらく第一の視点です。

馬鹿正直（前書き）

今回の内容は、馬鹿正直という事とは少し違うかもしれませんが、そういった題名をつけさせていただきました＾＾

馬鹿正直

今回が人生の中で一番馬鹿だった。

気が付くと、オレは家の前にいた。

話が弾み、ご満悦のオレ…。

だが、オレの馬鹿はこれでは終わらなかった。

本：「楽しかったよ、君と話ができて…」

：「本当に楽しかった…」

ここで本田が“ニヤリ”と笑ったが、昔のオレは馬鹿だった故、その真意を理解できなかった。

今思えば、本当に気味の悪い笑みだった。

しかし、先ほども言ったように、昔のオレはその笑みが理解できなかった故、本田を家の中に招き入れてしまったオレ…。

オレの家の廊下は狭く、本田が先に入ってしまったので全く前が見えない。

オレに見えるのは本田の背中だけ…。

そんな背中を見つめながら廊下を歩いていると、本田はベルトの背中側に手をあてた。

しかし何度も言うが、昔のオレはものすごい馬鹿で『何をしているのだろうか？』ということを少しも考えなかった。

それ故に、オヤジの居場所を聞かれてもすんなりと答え、オヤジの部屋まで案内をしてしまった。

馬鹿正直（後書き）

作者も馬鹿で正直ものです。

煌めく刃（前書き）

ふぅ…

疲れますね^^

煌めく刃

オレの帰りに、オヤジが「おかえり」という言葉を放つ。

ここで本田は、その言葉とほぼ同時に、ベルトに挟んであったナイフを取り出した。

オレの目の前で煌めく刃、、、

そして、“ヒュン”っと音をたてながらオヤジの肩に突き刺さる。

本田は投げたナイフを目で追いながら、オヤジの方に“ズカズカ”という音をたてながら近づく。

オヤジは書類を見ながら「おかえり」とオレに声をかけたので、『何事だ！！』と言わんばかりの顔で、ナイフの突き刺さった肩を押さえながらこちらを見た。

そして、本田を確認して、警察に電話をかけるために受話器を取ろうとする。

しかし、そんなオヤジより先に動いたのは本田だった。

ナイフを電話に思いっきり突き刺し、オヤジを睨み付ける本田。

オヤジはその本田の顔を見て、オレに向かって叫んだ。

しかし、何を言っているのかわからない。

オレの幼い頭には理解できず、頭は真っ白になっていたからだ。

ただ立ち尽くすばかりのオレ…。

そんなオレに目もくれないで、本田はオヤジに向かって言葉を放った。

「よくも裏切ったな！！」っと――――――。

煌めく刃（後書き）

作者は裏切られるのが嫌いです。

恐怖は足を止める（前書き）

ジェットコースターのような絶叫系はＯＫですが、
お化け屋敷のような恐怖系はどうも苦手ですね。

恐怖は足を止める

それは、憎悪を心の底から抱いたような声だった。

しかし、オヤジはそんな声に負けない力強い声で言葉を放つ。

「俺は裏切ってなどいない！」

「お前の犯行に足が残っていたんだ！！」

「俺は断じて警察などに言っていない！」っと――――――。

その後、オヤジはオレに向かって一言だけ言った。

「逃げろ…」っと――――――。

しかし、幼いオレは、足を全く動かすことができなかった。

恐怖、、、

これが幼きオレの足を止めたのだ。

しかし、そんなオレを本田は気にしなかった。
泣きじゃくるオレの前で、何度も何度も何度も何度もオヤジを刺したのだ。

「俺は被害者なんだよ！」

「俺は何も悪くない！！」

「お前の所為で！！！」

「オマエノセイデ！！！」

――――――――――――――――――――

――――――――――――――

――――――――――

そして、こんな悲惨な状況の中に彼女は現れた。

“ブス”

“ブス”

“ブス”

―――

その虚しい音が部屋に響く中、、、

「さーとーるぅー」「あーそーぼぉー」という声を携えて…。

恐怖は足を止める（後書き）

幼い無邪気な声…。

なんだか、かわいそうです。

無邪気な声（前書き）

俺にも、無邪気な時があったのだろうか？

無邪気な声

幼馴染のほたるの声…。

その無邪気な声も、悲惨な状況の前では無に帰した。

部屋中に散らばった血を見て、ほたるの顔から笑みが消える。

その顔は次第に涙を浮かべた表情になり、ほたるは数歩後退(あとずさ)る。

本田は、女の子…。

ほたるの姿を見て、ふと我に返り、部屋から慌てて逃げ去った。

その後、ほたるの絶叫…。

「うわぁーーーーーーーーーーーーー」っという、幼い女の子の叫び声を聞いて、外にいた人が家の中に入ってきた。

その人も、家の中の状況を見て数歩後退る。

しかし、オレ達子供とはさすがに違い、すぐに目を覚まし、持っていたケータイで１１９番…。

すると、そんな状況の中、オヤジはズタズタにされた体を引き

ずって、オレの下にやって来て言った。

「今から言う2つのことを忘れるなよ」

「まず、こいつが悪いと思っても……」

そして、その2つのことが、オヤジの最後に残した形見(ことば)になった。

オヤジの死に、オレと一緒になって泣いてくれるほたる。

オレが辛い時には、傍にいてくれて、オレを支えてくれた。

そのことに対し、オレは一度も礼を言ったことがない。

オレは過去から現在に意識を戻し、ゆっくりと口を開けた。

「心配するなよ！」

「オマエはオレが守るから…」

「昔オヤジが死んだ時、1人になったオレの隣にオマエがいた

ように、、、」

「ずっとずっと、オレはオマエの傍にいる」

オレはそう言った。

静かに、ほたるの瞳をじっと見つめながら…。

無邪気な声（後書き）

次回は第三の視点です。

復讐のための脱獄（前書き）

久々の更新ですね。

復讐のための脱獄

俺は奴に復讐するために脱獄した。

そんな俺は今、奴を殺しすために、脱獄した後に交通人からくすねた金で奴のところに向かっている。

地下鉄という文明の利器。

それが俺を奴のところまで運ぶ。

俺はそんなことを考えながら、地下鉄に“ガタンゴトン”と揺られ、どうやって今腰に差しているナイフで奴を殺そうかと考えていた。

しばらく考えていると、俺の頭にあることが2つ思い浮かんだ。

まず1つ目は、普通に配達人のような顔をして、家に入り込み殺す。

そして2つ目は、1人息子である“さとる”とやらと一緒に家に入り殺す。

だが、俺も鬼畜に成り下がった覚えはない。

だから、子供を使うのは少し卑怯かとも思った。

しかし、殺すのに鬼畜になりさがるもこうもない、、、

俺はそう思い、２つ目の殺し方で殺(やる)すことにした。

俺は目的地に到着したので、地下鉄から降りて、地上に出る。

そして、俺はここがどこだか詳しく把握するために、ぐるっと周りを見渡した。

コンビニでの暇つぶし（前書き）

コンビニでは、特に最近暇つぶしできないですよね…。
店員の目が気になって…気になって…。

コンビニでの暇つぶし

ここから、さとるの通う小学校は北に3～４００m行ったところにある。

俺は時間が沢山あったので、コンビニで暇つぶしをすることにした。

９時３２分、、、

俺がコンビニに入ると、コンビニの時計はその時間を指していた。

小学校では、まだ1限の授業中だろう…。

俺はそう思ったので、１冊のマンガを手に取った。

俺が漫画を2冊、３冊と読み漁り、合計４冊の漫画を読んだところで、俺は店の従業員の殺気を感じ取った。

『この客、いつまで立ち読みする気なんだよ！』

俺は、さすがに長くいすぎたことを、少しだけ反省して時計を見た。

１０時１４分、、、

『４２分もコンビニにいたのか！！』

っと、俺は自分でびっくりした。

しかし、まだ小学校が終わるには早いので、俺はコーヒーを買って散歩をすることにした。

「１３０円です」っとレジ係が冷たく俺に言う。

だから、俺はめげずに、ポイッと投げるように１３０円をレジ係に渡した。

その行動に「ありがとございました」の一言。

俺はその言葉を背に、コンビニを後にした。

心に火を灯す存在

とりあえず、散歩といっても、ここは俺の生まれたところから少し離れているので、知っている場所があまりない。

だから、小学校の様子を見るついでに、小学校の周りをぐるっとすることにした。

俺が学校に到着すると、チャイムが鳴った。

すると、『あぁ、懐かしいなぁ…』っと俺の想い出が疼(うず)く。

俺の小学校と何も変わらない風景…。

それが俺の心を癒した。

いや、癒すはずだった。

チャイムが鳴ったことで、一斉に運動場に出てくる子供達…。

その中の1人の子供が、俺の目にふと留まったのである。

その瞬間、俺の中での癒しの場が、そいつを目にした途端、憎悪の燃え滾る場となった。

実際、さとるという名のガキは、俺の復讐には無関係だった。

しかし、俺に火を灯すには、十分すぎる存在だった。

ニコニコと俺の生き様をあざ笑うかのような笑顔。

そんなことを思えば思うほど、俺の中の憎悪の炎は大きくなっていった。

『あぁ、奴を殺したい…』

その思いは、休み時間中止まらなかった。

ガキが俺の前から立ち去って、少しずつ、少しずつ俺の心が落ち着いた。

そして、俺はあることに気付いた。

『ダメだ…』『小学校の周りの散歩は…』

だから、散歩コースを、小学校の周りから民家の間へと変えた。

古びたパン屋。寂(さび)れた町並み。

俺はコンビニで買ったコーヒーを啜(すす)りながら、昔の雰囲気を堪能した。

空を見上げると（前書き）

空を見上げると！そこにはＵＦＯが！！

そんな冗談はさておき、本編どうぞ！！

空を見上げると

しばらく歩いた後に、俺は吉田探偵事務所まで歩くことにした。

南に向かって2，３０分ぐらい歩いただろうか？

寂れた風景が、賑やかになってきた頃、、、

俺は、吉田探偵事務所に到着した。

すると、中から“弱セレブ”という空気をかもしたおばさんが出てきた。

彼女は、満面の笑みで、奴との別れを慈しむ。

『あぁ、、、馬鹿だよな、、、裏切られるとも知らずに、、、』

俺はそう、心で呟いた。

その時、吉田の顔を見た実際の時間は数秒だった。

しかし、俺の中には激しい憎悪の念が生まれ出ていた。

だが、ここで誤って殺してしまえば、俺の“計画”が水の泡と化す。

だから、必死に『今まで待ったんだから、落ち着くんだ』と心に言い聞かせた。

我慢に、我慢を重ねた俺は、近くにあった公園のベンチに座り込んだ。

空を見上げると、／／／青い空／／／があった。

そこには、雲一つありはしない。

俺はそんな空に見とれてしまい、時間を忘れてしまった。

有り余った時間（前書き）

俺の場合は、時間がなくて困っている。

有り余った時間

気が付くと、俺は寝てしまっていた。

ベンチで寝ていたせいか、それとも単に寝相が悪かっただけなのかはわからない。

だが、起き上がると腰がものすごく痛かった。

だから、俺は少しだけ“ぼー”っとしてから時計を見た

砂が若干かかっていて、正確に指している時間がわからなかったが、だいたい１３時４０分を示していた。

『あぁ、寝すぎたな…』

そんなことを少し思ったが、学校はまだ終わらないので、『どうでもいいや』と思い、もう一度寝転んで目を閉じた。

次に目を覚ましたのは、１４時２０分、、、

『何とも、ビミョーな時間…』　俺はそう思った。

しかし、もう一度寝てしまっては、起きることはできないだろう…。

だから、俺は立ち上がり、少し伸びをした。

すると、「うぅ…」と思わず口にしてしまった。

『腰が痛い…』

そう心が訴えるので、気を紛らわすために、鼻歌交じりで歩き出す。

ゆっくりゆっくり、近づく俺の足。

その足の先には、奴の子供が通う小学校があった。

奴を殺すまでの第一歩

数１０m先に進んだところで、俺は3人の小学生を見つけた。

『しまった！！もう学校は終わっているのか！！』

俺はそう、心の中で叫んだ。

早くなる足取り…。　走る俺…。

小学校に近づくにつれ、増えていく子供達…。

『もう、さとるは帰ってしまったのか？』

そんなことを思っていたら、俺は小学校の前に到着した。

『どうしようか？』　と立ち止まって考える俺。

少しして、『よし、、、人が出てこなくなったら、探偵所に行こう』という答えを導く。

今までの暇つぶしが、ことごとく無駄になったが、今更仕方がない。

そう思った瞬間！！ニコニコと笑うさとるを、俺は発見した。

どうやら、２人で帰るようだ…。

仲良く、女の子と話しながら門をくぐる。

俺は、さとるの後を付けることで、少し様子を見ることにした。

それからしばらく、、、

距離にするならば、４，５００ｍ先だろうか？

そこのところで、さとるは、一緒にいた女の子に「また後で！！」と別れを告げる。

『やっと、やっと１人になった、、、』

それまでの時間を思い返せば、永遠とも思えてしまう。

そんな風に俺は感じた。

『ついに奴を殺すことができる』

そう思った瞬間、俺の心はニヤリと笑った。

“笑い”と“イライラ”を堪えて

ニヤリと笑う心を、俺は堪えつつさとるに近づき、口を開いた。

俺：「あの・・・吉田探偵事務所のところの子だよね？」

：「僕の名前は本田剛って言うんだけど、君の名前は？」

自分で言っといてなんだが、“僕”って言うのはさすがにキモイ…っと思った。

そんなことはさておき、さとるは俺の言葉ににこやかに返事をした。

さ：「吉田慧って言うんだよ、僕の名前」

それを聞いて、俺は話を進めた。

俺：「そうか、さとる君かぁ…」

：「よろしくね？」

さ：「うん！！」

俺：「ところでさ、僕この前君のお父さんのところに相談しに行ったんだよ」

さ：「そうだったんだ！！」

：「僕はお父さんの仕事について詳しくは知らないけど、昔ね？」

：「お父さんは仕事のことを『やりがいのある仕事だ』って言ってたよ」

：「この間だって、女の人の事件を解決したし、その前だって、その前だって“う～ん”とすごい量の事件を解決してるんだ！！」

：「すごいよね！！お父さんって！！」

そう言って“う～ん”のところで空中で大きく円を書くさとるに対し、俺は心を燃やし続けた。

それからしばらく、聞きたくもない簡単な事件から難事件までの話を聞かされた。

そして、わかった。

奴は子供に愛を注いだ。

しかし、その愛の分だけ、奴は俺に憎しみを注いだ。

大きく膨らむ、憎しみという名の風船。

困ったことに、今にも破れてしまいそうだ。

そういったことを押さえようとすると、イライラする。

とてもイライラする…。

そんな気持ちをどこにぶつけよう？

そんな疑問を持ち始めた頃、俺はついに奴のところに到着した。

ボールのように弾む心

心が、まるでボールのように弾む。

『やっと！やっと、殺せるんだ！！』

その思いが俺の口を開かせた。

俺：「楽しかったよ、話ができて・・・」

そう言って、俺は事務所への入り口を開けた。

『やっと消える・・・俺の中の憎しみが・・・』

『生きて償えだと？罪もないこの俺が？』

『こんな世の中は、絶対におかしい』

『世の中がおかしいなら、その中に住む俺だっておかしくないと・・・』

『だから、俺は2重人格など、よもや関係なしに人を殺す』

俺は復讐のため、そう心に言い聞かせた。

一歩、また一歩と近づくたび、思わず口元が緩む…。

そして、俺は部屋の取っ手に手をかける…。

『さて、どんな顔を奴はするかな？』

そう思いながら、ゆっくりと、実にゆっくりと取っ手を回した。

高鳴る鼓動と共に

“ギギギィ・・・”

扉が音をたてて、俺の入場を示す。

そして、俺はすぐさま奴を探した。

“ドクン”“ドクン”と高鳴る鼓動、、、

俺は部屋の中央に、奴を見つけた。

今、奴は座って何かの書類に目を通している…。

それを見た俺の心は『チャンスだ！！』と叫ぶ。

俺は心に従い、無音にして、じりじりと奴に近づいた。

そんな俺とは関係なしに、入り口付近に立ち尽くしているさとる。

そんなさとるを想って、息子に「おかえり」と発する奴。

俺は心で笑いながら『ただいま』と言い、奴に向かって手にしていたナイフを投げた。

ナイフは音をたてて奴の肩に突き刺さり、奴は俺を『何事だ！！』と言わんばかりの顔で睨んだ。

そんな奴の顔を見て『ムカつく』と思う俺…。

その怒りは、俺をさらに進ませた。

警察に電話するためか、電話に手をかけた奴に、俺は“ズサズサ”と近づき、電話をナイフで刺した。

すると、もう『ダメだ』と思ったのか、奴は自分の息子に「逃げろ！！さとる！」「逃げるんだ！！」と叫ぶ。

そんな姿を見て『子供の心配なんてしやがって・・・』と俺の心がさらに苛立つ。

そして、俺は叫んだ。

「よくも裏切ったな！！！！」　と…。

殺人を犯す俺と、証拠を消す俺

俺は“叫び”と同じくして、ナイフを奴の胸に突き刺した。

それを受けて、奴は言う。

「裏切ってなどいない・・・」「お前が足を残したのだ！！」

と…。

『そんなはずはない』　と俺の心は奴の言ったことを否定する。

『俺の・・・』

『もう1人の俺が殺人を犯して、俺が完璧に証拠を消し去る』

『それが、俺の今まで生き抜いてきたやり方だ・・・』

『その殺人方法が、奴に話したすぐ後にバレたんだ！』

『奴が話さないで、バレるわけがないだろう？』

そんな思いに俺は呑まれた。

―――――――――――――――――――――

―――――――――――――――
――――――――――

気が付くと、何処からか声がした。

「さーとーるー」「あーそーぼー」と…。

俺はその声を聞き、我に返った。

そして、反射的にその場から立ち去ろうと決め、俺は出口を目指した。

その時に、「さーとーるー」と声を上げた女の子と目が合った。

その女の子は俺と目が合った直後、俺のやった現場を見て腰を抜かした。

そんな女の子を見て、『かわいそうなことをしたな・・・』と少しだけ思った…。

そう、、、ほんの少しだけ、、、

死して得たもの

我に返り、外に出ようとした俺は、女の子が現場の悲惨さを見て叫んだせいで、玄関のところで中に入ってきた人にぶつかりそうになった。

しかし、ギリギリのところで躱(かわ)し、扉を抜けて外に出た。

すると、服には“べっとり”と血が付いていたため、歩道を歩いていた人が大声で叫んだ。

それから32分後のことである。

俺は近くの路地で警察に捕まり、その5日後に死刑になった。

裁判では、罪なき人々を殺したとして判決が言い渡された。

もう、“生きて償う”なんて余地すら与えられなかった。

そして、わかったことが2つあった。

俺が起こした殺人事件の最後の被害者である吉田茂(よしだしげる)は、本当に警察には何も話していなかったらしい…。

俺は無意味なことをした…。

『あぁ、、、俺はなんて馬鹿なんだ、、、』

『あぁ、、、俺はなんて馬鹿な人間なんだ、、、』

そうやって、俺は死ぬ瞬間に、初めて自分のしたことを後悔した。

死して得たもの（後書き）

第三章はこれで完結です。
次回は第二章となります。

から揚げ（前書き）

第二の視点　ｐａｒｔ２　は、現在と過去に分けることにしました。

まずは現在です（＾ｏ＾）ノ

から揚げ

私に向かって、さとるは言った。

「心配するな！お前は絶対に守るから！」

「昔、オヤジが死んだ時に、1人になったオレの隣にお前がいたように、ずっとお前の傍にオレがいるから」

そう言われた私は、嬉しさのあまり何も言えなくなってしまい、数秒間私達は見つめ合っていた。

その後に、さとるは照れ笑いをして、私の瞳から目をそらした。

そして、私もつられて目をそらした。

そして、思った。

『一体、いつ以来だろうか？』

『私とさとるが2人で笑い合っているのは…』と――――――

もうすっかり冷めてしまったカップラーメンの汁を啜りながら、さとるはから揚げを1つ手にして話した。

さ：「もう冷めてっけど、これ食えよ・・・」

そう言って、から揚げの乗った皿を私のところにやった。

そして、私は勧められたまま、から揚げを1つ箸で掴んで口に入れた。

そして思った。

『確かに、冷たいなぁ』と――――

1つ屋根の下で

そんな冷めたから揚げを口にして、私はふと思った。

『さとるとどれくらい話していたのだろうか？』

その疑問にさとるの部屋の時計は答えを出した。

２０時５０分と――――――

私は、それを見て思わず声を上げてしまった。

私：「あっ、もうこんな時間、、、」

その言葉を聞いて、さとるは言う。

さ：「ん？」

：「本当だ！！」

：「もうこんな時間になっていたのか！！」

そして、少し疲れを見せたような表情をした後、私の方を見て付け加える。

さ：「お前、今日どうするんだ？」

私には最初、この意味が理解できなかった。

しかし、少し考えると鈍感な私にも理解できた。

私：「泊ってっていいの？」

私は、“これ”を恐る恐る聞いた。

しかし、そんな思いはすぐさま“無”に帰した。

さ：「今から帰ったら、１０時過ぎにしか家に着かないだろ？」

：「そんなん危ねぇじゃねーか」

：「だから、泊ってけよ」

さとるはそう言ってくれた…。

１つ屋根の下で２人きり。

私は、そっちの方が危ないと思ったけど…。

思わぬ風

さとるの優しさに負けた私は、顔を赤くして「じゃあ、甘えるね・・・」と言う。

それを聞いて、さとるは笑い、最後のから揚げを手にして言う。

さ：「んなことで照れるなよ！」

：「昔はよく泊まっていただろ？」

『昔と今じゃ、全然違う！』　私はそう思ったので、そのままを口にした。

私：「昔と今じゃ、違うよ！！」

しかし、さとるはそれを思わぬ風（かたち）で返してきた。

さ：「同じだよ・・・」

：「お前はお前で変わらない・・・」

：「そうやって照れるとことかも・・・」

『／／／／／』

そんなことを言われ、さらに顔を真っ赤にした私は、その15分後ぐらいしてお風呂を借りることにした。

懐かしいお風呂

『昔と、ちっとも変っていない…』『懐かしいなぁ…』

私は、湯船につかりながらそう思った。

透明なお湯が、私を映し出す。

その顔は、ここに来る前より、、、

さとるの家に来る前より、明るくなっていると思った。

私自身でも感じる、心の変化があったからかもしれない。

『ここに来てよかった・・・』

不安をなくすことができたし、さとると会話もできたし…。

『本当にここに来てよかった・・・』

私は、そんなことを思い、お風呂から出た。

懐かしいお風呂（後書き）

次回は、過去編ですが、いつになるかわかんないです…。

真っ赤な血

私は、詳しくは知らない。

というか、ただ単に、詮索ができなかっただけだけど…。

しかし、私は現場を見てしまった。

おじさんの殺される現場を…。

けれど、はっきり言って、小さすぎてあまり覚えていない。

でも、おじさんの胸にナイフが突き刺さった光景は、今でもしっかり目に焼き付いている。

あの真っ赤な液体が、部屋に徐々に広がっていく、決して忘れることのできない悲しい惨劇。

私は、おじさんの胸にナイフが刺さった瞬間、思わず叫んでしまった。

だって、私はさとるの家に遊びに行こうとしただけで、血を・・・

真っ赤な血を見るつもりなんて少しもなかったのだから…。

私は泣いた。

長い時間をかけて、泣き続けた。

こんな私にも優しかった、おじさんの死に対し、涙を抑えることなんて、私にはできなかったのだ。

心の穴

おじさんが亡くなってからの、初めてのさとるの誕生日。

私達2人は泣いて、泣いて、泣きまくった。

それは2人とも、ただ悲しかったから…。

ただただ、辛かったからである。

私には両親ともいるけれど、さとるには両親がいない。

幼い私でも、それくらいのことは理解できたから…。

いつも私が遊びに行くと、「よく来たね」とおじさんは微笑んでくれていた。

しかし、あの日から私に微笑みかける笑顔は、もうありはしない…。

そう、、、

私の心にはポツリと穴が開いてしまった。

だが、それはさとるの方も同じだろう。

いいや、私よりさとるの方が、はるかに酷く傷ついているだろう。

大好きだった人が死んでしまって、心に穴の開かない人間がいるだろうか？

少なくとも私は、そんな人間はいないと思う。

私達は、そんな心の穴を埋めるため、必死に必死に楽しく振る舞い続けた。

励ましあった日々

けれども、そんな風に、２人で励まし合ってきた日々は、永遠ではなかった。

６月９日、私の誕生日の５日前、、、

１６時半を過ぎた頃、私達２人はケンカした。

私：「なんでわからないの？」

そう、私はさとるの部屋で叫ぶ。

さ：「いや、その、、、ごめん、、、」

ここで、なぜかさとるは謝った。

さとるに悪いところは１つもないのに…。

しかし、私はそれをさらに責め立てる。

私：「「なんで？」って聞いてるのに、「ごめん」って答えはおかしいんじゃない？」

さ：「ごっ、ごめん、、、」

私：「だーかーらぁー」
：「そのごめんがダメなんだって！」

私は、あきれ気味にその言葉を発した。

さ：「そんなこと言われたって、わかんないものはわかんないし、怒られたってそれがわか――」

ここで私はさとるの言葉を遮った。

私：「もう知らない！」
：「うじうじしてばっか・・・」
：「男なんだから、もうちょこっとしっかりしたら？」

そういって、私はさとるの心にナイフを突き刺した。

私の義務

黙り込む2人のいる部屋の空気が重くなるのがわかる。

しかし、この後さとるが言うことに対し、私は言ってはいけないことを言ってしまう。

さ：「知らないよ」

：「僕にはわかんないよ！！！」

：「そんなこと、、、」

：「そんなこと、ほたるに言われる筋合いないじゃん！！」

私はさとるがキレた瞬間を、この時初めて見た。

私：「私に言われる筋合いがないって？」

：「じゃあ聞くけど、他に誰がさとるに言うのよ！！」

この時の私は本当に馬鹿だった。

《親のいないさとるを見守るのは私の義務》

そんなことを思っていたからだ。

私は、さとるにとんでもないことを言ってしまった。

それに対し、さとるは決別を選ぶことになる。

さ：「鬱陶しいよ・・・」
：「ほたる、、、うっとしいよ！」
：「僕には、保護者はもういないんだ！！」
：「だから、ほたるに保護者面（ほごしゃヅラ）されたくないよ！！」

この瞬間に、２人の心にはひびが入ったのだ。

子供の悪戯（前書き）

再び現在に戻ります！！

子供の悪戯

あれから、さとるにどれだけ『ごめん』って言おうと思っただろうか？

けれども、思いはしただけで、言葉にすることができなかった。

それは、さとるに合わせる顔がないと思ったから…。

それは、さとると顔を合わせる勇気がなかったからだった。

しかし、恐怖のせいで夜も眠れなくなった私。

私の持っていたテープを、子供の悪戯（イタズラ）だと決めつけた警察。

この2つの出来事があったおかげで、勇気のない私でも、さとるの家のチャイムを押すことができた。

これで、死んでも悔いは残らない…。

まぁ、死んでしまってはどうにもならないんだけど…。

大きなTシャツ

そうして、私は湯船から上がり、シャワーでもう一度体を洗い流した。

“キュッ”と音をたててシャワーの水を止めると、私はお風呂から出て、さとるが置いておいてくれたタオルを借りて、体に付いた水滴を拭う。

そうすることで、温かいタオルの生地が心を癒してくれそうだったから。

そして、体を全て拭き終わった後に、さとるの昔着ていたTシャツを着た。

これは、さとるが押入れから出してきてくれたもので、2，3年前のものだったけど、それでも私には大きかった。

今では、頭1つ分以上違うけれど、昔は私の方が早生まれだったからか、大きかったのになぁ…。

そんなことをTシャツを着ながら考えていた。

恥ずかしくて

私は、お風呂から出て、さとるの待っていた部屋に戻った。

私：「お風呂ありがと・・・」

：「お湯が冷める前に入って・・・」

私がそういうと、「わかった」と言ってさとるは腰を上げた。

それから、さとるは洗面所を通ってお風呂に入ろうとした時、私に向かって「暇だったら洗濯頼めるか？」と聞く。

私は、何かしていたかったのもあって、「いいよ、やっておくね」と答えた。

しかし、さとるがお風呂に入り始めて、いざ作業をし始めると、困ったことに気が付いた。

それは、下着であった。

さすがに、私も他人の下着を洗ったことも、触ったこともないわけで、恥ずかしくって仕方がなかった。

私は、Tシャツやズボン、そして下着などで、ネットに入れるものは入れた後、洗濯機に入れて、“スタート”のボタンを押した。

すると、洗濯機は“ゴウンゴウン”と音をたてて回り始めたのだった。

兄の意思（前書き）

ついに、４人目が登場！！

では、どうぞ！！

兄の意思

“ぜったい、、、”
“絶対に約束守るからね、、、”

私はその想いを胸に刻んで、手紙を燃やした。

それは、物ごころ付いた頃から、私に届いていた手紙(もの)だった。

私のおにぃちゃんは、9年前に死んだ。

『女子高生連続殺人犯“死刑”』という形で…である。

そのおにぃちゃんとした約束は、、、

約束の内容、、、すなわち手紙の内容は、

「愛理、俺の大事な愛理へ・・・
俺はもうすぐ死ぬことになるんだ。
もう1人の俺が、もう1つの人格の俺が女子高生を殺害したという理由で。
俺には、《愛理》と、《警察への復讐》のことしか考えられないんだ。
けれど、俺はもう死んでしまう。

だから、、、

本当は大好きな愛理には頼みたくはないのだけれど、
俺には愛理しかいないから、俺のために人を殺してくれないか？

俺がした通りの殺(や)り方で。

警察は、驚くだろう。
また、この俺の再来だと。

お願いだ。

だっから、約束してくれないか？

おにいちゃんのために殺人を犯すことを・・・

兄より

」

ねじ曲がった思想

だから、私はおにぃちゃんのために人を殺すことにした。

今はもう記憶にない、アルバムの中のおにぃちゃんのために…。

『最初はどんな人にしようかなぁ？』

『やっぱり、おにぃちゃんみたいに女子高生にしようかな？』

『どうしよう、、、？』

『よーし！！決めた！！』

『次は殺し方かな？』

『ナイフで何度も刺す？』

『ダメだ、、、それだけじゃ足りない』

『前よりも、もっと酷いやり方をして、もっとすごいおにぃちゃんを再来させるんだ！』

愛理の考え方は、ねじ曲がっていた。

兄を想うが故、さらに酷く殺人を犯す。

恐怖の兄を再来させるために…。

しかし、愛理はわかってなどいなかった。

殺し方を変えてしまえば、警察が追おうとする犯人像も変わってしまうということを。

しかし、そんなことはどうでもよかったのだ。

なぜなら、全ては兄のため…。

殺人を犯すこと自体が、兄のためだと思い込んでいたのだから。

「待っていてね、おにぃちゃん、、、」

「すぐに復活させてあげるんだから！！！」

その考えが裏目になることを知らない愛理は、この後家を出ることにした。

キモチヨクテ

私は街に行くことにした。

私の住んでいる場所は、どちらかというと田舎なので、いい感じの、、、殺したいと思う女の子がいない。

だから、今日は偵察するつもりで街に行くことにした。

今日は土曜日だから、学校を見に行っても、部活をやっている女の子しかいない。

けれど、仕方がないと思った。

だって、平日は私自身も学校があるから、私が授業終了後に行っても、もうみんなは下校しているだろうから…。

だから、私は今日街に行くことにした。

まず始めに向かったのは、県下でかなり有名な女子高。

『あぁ、いい匂いがする・・・』　そう、私の心が疼く。

『人間(おんな)のいい香り・・・』　そう、再認識しようとする。

『早く殺(ヤリ)したい』　私の心が雄たけびを上げる。

正直、自分でも驚くほど足が軽く、そして速く進む。

これから、いけないことをするというのに、、、

人殺しをするというのに、なんという反応か！！！

私は、自分の反応(からだ)に驚きが隠せなかった。

なぜなら、人を“殺せる”と思うだけで、キモチヨクなれるんだから…。

『あぁ！！ゾクゾクする！！！』

目標設定

しかし、私はやるべきことを思い出した。

『いけない、いけない、、、今日は偵察だったんだ、、、』

『そもそも、武器は持ってないんだから、人殺しなんてできないし…』

『でも、今度来た時は、殺すんだからだから、怪しまれないようにしなくちゃ！！』

そう自分に言い聞かせて、偵察を開始することにした。

私の狙っていた学校の門をくぐると、入り口の警備室のところで「どこの子だい？」と質問されたけれど、「おねえちゃんに会うために来た」と言うと、すんなり入れてくれた。

『ウザい警備員！！殺しちゃいたい！！』

『でも、ダメダメ、、、』

『私の殺す相手は女の子なんだから！』

そう思いながら、学校を偵察のためにうろうろしていると、わ

かったことがあった。

やっぱり、女子高と言っても、可愛い子からブスな子まで色々…。

『どうせ殺すなら、可愛い子の方がいいよね？』

そう、私の胸が訴えるので、《殺す相手を可愛い子にする》と目標を設定することに決めた。

しかし、そう設定したためか、可愛い子を見ると、心の奥底がウズウズするのだ。

『もう、我慢できない、、、』

そう心が訴えるので、今日は家に帰ることにした。

どんな人を殺すか

家に帰り、ベッドの上でゴロゴロしながら、ふと考えた。

『どんな子を殺そうか？』

『《可愛い子を殺す》と言うことまでは決めた』

『でも、可愛いにも色んな種類があるんだよなぁ』

『かっこ可愛い系？』

『それとも、清楚系？』

『それか、ボーイッシュな感じな子？』

『どうしよう、、、？』

『でも、まず始めは清楚系の子の方がいいなぁ』

『そういったこの方が、世間から見ても“可哀そう”と思われやすいしね』

『それに、ボーイッシュな感じの子も良いけど、そういった人だと小学生の私が殺すには大変だからなぁ…』

『よぉーし！！！！！』

『最初は清楚系な感じの子に決めた！！』

そんなことを考えていたら、いつの間にか私は夢の中に入り込んでいた。

朝起きると、昨日の夜、お風呂に入っていないせいか、体が気持ち悪かったので、ベッドから出て、お風呂に入ることにした。

家族という存在

私はお風呂から出ると、体を拭いた。

そして、水滴がなくなった頃、私はタオルを洗濯機に入れた。

私の家族は、おにぃちゃん以外に誰もいない。

なぜいないのか？いつからいないのか？、、、

そういったことは全然わからない。

ただ、何処にもおにぃちゃん以外の家族の姿がないのだ。

アルバムにも、私の心の中にも、、、

だから、私は洗濯機だって、料理だって、何でもできてしまう。

おにぃちゃんは、私が2歳の時に死んでしまった。

けれど、おにぃちゃんは、私の心の中で、今も尚生きていると信じている。

その理由は、私はおにぃちゃんが大好きだった。

正直、2歳の時の記憶なんて曖昧で、よくわからない。

けれど、私はおにぃちゃんが大好きだった。

だから、私がおにぃちゃんのことを信じて、“生きている”って思わないと、ダメなんだ。

私は何故か、そんなことを思っていた。

ゾクゾクするニュース

私はお腹が空いたので、テレビの電源を入れた後、朝食を作り始めた。

まず始めに、ご飯は昨日炊いておいた。

なので、卵でも焼いて、適当に食べようと思い、私はフライパンに油をひいて、卵を焼き始める。

そして、完成した卵焼きを皿に盛りつけて、私は食べ始めることにした。

一口、また一口と食べ進むと、ニュースが始まる音がテレビから聞こえてきた。

「みなさん、おはようございます」

「おはよう…」

私は家の中で「おはよう」という言葉を誰にも言うことはできない。

それは、言う相手がいないから…。

そんな寂しさと言うのかを、紛らわすために、私はニュースキャスターに、毎朝「おはよう」と言っていた。

そんな理由もあって、テレビを見ていた私だったが、それ以外にも理由はあった。

それは、ニュースが面白いから。

それは、ニュースがとても面白いから。

ニュースは、世間の目があって、殺し方とか、殺され方とかが詳しく報道されない。

だから、視聴者である私達は、自由に妄想(かんが)える権利がある。

いいや、むしろ義務とでもいうべきだろうか？

この被害者は、どのように死んだのか？

どのようにして殺されたのか？

“ブスッ”とナイフで殺されたのだろうか？

何度も何度も刺されて、死んだのだろうか？

痛い中、どれだけの意識を保つことができたのだろうか？

刺された感覚は、キモチヨカッタのか？

果たして、どうなのだろうか？

考えただけで、ゾクゾクする！！！！

だから、私はニュースが好きだ。

退屈な天気予報

そんなことを考えていた私だったが、いつの間にかニュースは終わり、退屈な天気予報が始まっていた。

「本日は比較的、雲が空を覆い付くし、どんよりとした空気が目立つでしょう」

「また、明日の18日の天気は晴れであり、順調に空模様は回復していくでしょう」

「では、その後の19日からのお天気を見ていきましょう」

――――――――――――――――

――――――――――

――――――

そうして、8時から9時までのニュース、及び、天気予報は終わった。

私は、食べ終えた食器を洗って部屋に戻る。

その理由は、《最初の被害者をどのように殺すか？》を考えるため…。

だから、私は椅子に座って、近くにあったお気に入りのぬいぐるみを抱っこした。

そもそも、この“お気に入りのぬいぐるみ”を抱っこするという行為は、私の癖である。

私の部屋に、いくつものぬいぐるみがある中、このお気に入りの“ピンクのウサギ”のぬいぐるみは、４歳の時に、おにぃちゃんから送られてきたものであった。

だから、このウサギちゃんは私のお気に入りなの。

そう思いながら、私は考え始めた。

純粋な欲求

「そぉ～だなぁ～」

私はその言葉をテキトー発して後、再び考える言葉を発した。

「うーん・・・」「え・・・っと・・・」

「どうしようかなぁ・・・？？」

そんな言葉を何度か発していると、急に名案が思い浮かんだ。

「私のおにぃちゃんの最初の殺人は、ナイフだったから、、、」

「よーし！！私も同じにしよう！！」

そんな感じで思い浮かんだ名案は、見事私に採用され、殺される（りそう）の女の子も、後に続くように思い浮かぶ。

『なんて私は冴えてるんだ！！』

そんな風に感じた私は、「さて、いつ殺してあげようか？」と呟き始める。

考えるだけでゾクゾクして、実行しようという思いが強くなるほどワクワクする。

このころから、愛理は“ワクワク”を純粋な欲求だと思い込み始めた。

次に、私は“いつ”と、“どこで”について考えることにした。

「今度の木曜にしようかな？」

「学校は5限目までしかないんだし、、、」

「よぉーし！！！」「そうしよ！！！」

「じゃあ、、、」

「どこで殺してしまおうか？」

「やっぱし、人通りが少ない方がいいよなぁ～」

「う～ん・・・」

「人通りが少ないところで殺すって言っても難しいなぁ・・・」

「でも、殺すときは、ブスって挿(い)けばいいわけだから・・・」

そんな時、“殺す”と言う風景が、私の中で流れた。

・・ ブス！・・・ ・・ ・ブスッ！・ ・・ザック！・・・
・・・・・・・ グシャッ！！・・ ブス！・・・ ・・・・・・・
・ブスッ！！・・・・・・・・ザクッ・・・・・・・・ ・・グシ
ャッ！！！・・・・ ・・グチャ・・ ・・・・・・ブスッ！・・・・
ブス！・・・ ・・・ ブスッ！！・・・ グチャ・・・ ・・・・
ブスッ！・・・ ・・ ・・グチャ・・ ・・・・ブスッ！・・・・
・・・・ ・・ベチャ！！・・・ジャク！・・・・ブス！！！・・・・
・・・

そして、私は叫んだ！！！

「・・・・・・・・・・」

「あぁ、早く殺してやりたい！！！」

「ゾクゾクするんだからぁぁぁぁ！！！！！！」 と――――

狂気の誕生

ふと我に返ると、「キャァーーー」という声が、１つ部屋の中にあった。

それは、私の目の前にあった物の所為。

私は視界を広げ、あたり一面に散らばった物を凝視した。

しかし、その何処の場所にも広がるのは、綿(わた)。

あたり一面にあるのは、綿・わた・ワタ、、、

私は怖くなって、「なんで・・・？？」という言葉を発する。

しかし、そうも怖がってはいられない。

だから、私は現状を知るべく、手にあるものを見た。

右手には、はさみ。　左手には、ズタズタになったモノ。

『これは、、、』

『これは、私の大好きなぬいぐるみ・・・？』

「うそ・・・きゃぁあああああ！！！！！！」

私は現状に、絶句した。

何度も何度も悲鳴を上げて、私は今起きていることを拒絶しようとした。

しかし、何も変わらない。

何も変わろうとしてくれない。

『だって、これが現実だもん！！』　そう、心の中で、声が谺（こだま）する。

そして、もう一つ谺するものがあった。

『あははははっは！！！』

『アハハハハハハ！！！！！！』

『アハハハハハハハハァァ！！！！！！』

この時、愛理の中に狂気が生まれた。

止まらないドキドキ

２１時４７分、、、

ほたるが風呂から出てきて言う。

「お風呂、ありがと・・・」

「お湯が冷める前に入って・・・」と―――。

それに続いて、オレは「わかった」とそっけなく言う。

その理由は、とてつもなくドキドキしていたから。

だって、好きな女の子が自分の家の風呂に入ってるんだぞ？

そんなんで、ドキドキしない男なんて、男じゃねぇよ！！！

そんなことが、理由だった。

オレはそんな気持ちを隠しながら、「暇だったら洗濯頼めるか

？」と言う。

ほたるは一瞬、「え！？」と戸惑いを見せたけれど、「別にいいよ」と了承してくれた。

オレは、その後、心の中で「ありがとう」と言いながら、服を脱いで風呂に入った。

ほたるの後ということで、いつもと違う風呂になった。

それは、ドキドキが止まらないのだ。

『なぜだ！！　止まれよ！！止まれよ！！』

そう、心で叫び続けることも虚しく、オレの心音は、湯につかっても大きくなることを止めようとはしなかった。

一本の電話

湯に１０分程浸かってから、オレはシャワーを浴びて風呂を出る。

そして、オレは先ほどまで洗濯物のあったところが、すっかり綺麗になっていることに気が付く。

人のパンツなど、オレのパンツなど触りたくもなかっただろうに、、、

しかし、オレがほたるのに触るにも恐れ多いので、任せてしまった。

そのことを、“嫌”とも言わずにやってくれたほたるに、オレは感謝しつつ体を拭いて服を着た。

オレが部屋に戻ると、ほたるは座ってテレビを見ていた。

いいや、眺めていたと言うべきだろうか？

どことなく“ぼぉー”っとした感じで、ＣＭを眺めているほたる。

オレは、そんなことに気が付かないふりをして、ほたるに話しかける。

俺：「何を見てるんだ？」

ほ：「え？」「あっ、あぁ・・・」　そう言って、首を振るほたる。

俺：「どうかしたか？」　俺は他の質問をしてみる。

ほ：「いや、ちょっと考え事をしてて・・・」

：「テレビはつけてるだけで、見てないよ？」

そう言って、ほたるは少しだけ顔を赤くした。

オレには何を考えていたかはわからないし、そのことを知られるのが恥ずかしかったからか、“ぼぉー”としていたのが恥ずかしかったのかは知らないが、ほたるは確かに顔を赤くした。

それから少し時間が過ぎた後の話である。

２１時１０分、、、

一本の電話が“プルルルル・・・”

“プルルルル・・・”と鳴った。

白と黒の狭間で

私は怖くなって寝ようとした。

しかし、体が“ガタガタ”と震える。

『怖い・・・怖い・・・』と体が悲鳴を上げる。

『嫌だ!!!』　そうとも、叫んだ。

現実から、兄という呪いから逃れたくて、

『世界(スベテ)から逃れたい』と、体が悲鳴を上げる。

私はずっとずっと、怯えていた。

怖くて、長い間眠れなかった。

しかし、気が付くと私は眠っていた。

目が覚めると、現実は朝だった。

時計を見ると、時刻は7時半。

『よかった・・・』　『学校に間に合う・・・』

そう思いながら、私は急いで学校への支度を始める。

しかし、服を出そうとした時、そこには私の見たことのないワンピースがあった。

「なに・・・？これ・・・？」

私は、そうやって疑問を口にする。

しかし、疑問を口に出したところで、答えが出てくるはずもない。

いつも私が着るのは、白のワンピース。

目の前にあるものは、黒のワンピース。

箪笥を開けても、クローゼットの中を見ても、どこもかしこも、黒・黒・黒！！

私が持っていたはずの数十着のワンピースが、どれも変わっていた。

今までは、じっくり見ないと違いも分からないような、純白のワンピースだった。

ただ、それがオシャレか、オシャレじゃないかの違いなだけで、全て真っ白だった。

しかし、今目の前にあるのは、黒のワンピースだけ。

私の持つ全てのものが、白から黒に変化した今、私は怖いながらも、仕方なくそれを着る他なかった。

気持ちの裏腹（前書き）

ついに６０話ですね。
ここまで読んだくださった方、ありがとうございます（＾＾♪
では続きをどーぞ！！！

気持ちの裏腹

“なぜ、黒のワンピースになってしまったのか？”

そんなことを考えていても、キリがない。

だから、私はワンピースを着た後に、いつも通り朝食を作った。

まぁ、作ったと言っても、ヨーグルトにブルーベリージャムなどを加えたもので、とても簡単なもの。

私は、これを良く食べる。

それは、ヨーグルトが体に良いっていうから。

そんな朝食を食べ終えて、歯を磨いた後に、私は家を出る。

そして、いつも付けている腕時計を見た。

時刻は８時１５分。

この時計は、小学校入学時に、おにいちゃんがくれたものだ。

でも、そんな時計を見ても、気は紛れない。

今の私は、朝から妙なことがあって、気持ち悪い。

けれど、学校ではそんな素振りを見せないように、振る舞う。

ここで、「なんで、今日は黒いの？」って何人もの子が聞いてきたけど、「イメチェンだよ！！」と明るく答えておいた。

しかし、そんな学校での姿の裏腹、ムズムズと蠢(うご)く狂気があった。

我慢と決意

帰りの会が終わり、家に帰ることになった。

“テクテク・・・テクテク・・・”

そうやって、家に向かっていると、ある女子高生とすれ違った。

“ウズ・・・　ウズ・・・”

そうやって、私の心が『殺したい』と反応を示す。

「何を“我慢”してるの？」

狂気が私に、そう問いかける。

「私は長い間待ったんだよ？なんで殺さないの？」

続けて、そう言葉を連ねる。

「ダメだよ！」　「まだダメ・・・」

「殺すのは木曜にするって決めたんだから・・・」

私は自分の決意を心に告げる。

しかし、狂気は、それを聞こうとはしなかった。

「ばっかじゃないの？」

「そうやって、逃げてばっかで・・・」

「その手に持ってるハサミで殺しちゃいなよ！」

そう言って、狂気は笑って見せる。

《――手に持ってるハサミ――》

私は、その言葉を心の中で反芻する。

『私は、手にハサミなんて持ってないけど？』

そう思っては良いが、しっかりとその手にはハサミが握られていた。

『え？なんで私の手に？』

そう思ったと同時に、私は手に持っていたハサミを落としてしまう。

だって、筆箱の中に入っていたものが、出してもいないのに手の中に…。

ビックリしないはずがないじゃない！　この１つを除いてね…。

悪魔は染める

アハハハハ・・・アハハ・・・アハハハハ！！！！

そうやって、心の中で叫ぶ狂気。

いいや、、悪魔と呼んだ方がしっくりくるかもしれない。

私は自分自身が怖くなった。

だんだんと、自分が黒くなっていくのがわかる。

あの大好きだった白のワンピースが黒になったように、いつか自分も真っ黒に…。

真っ黒になってしまうのが怖くなった。

けれど、悪魔は悪魔でしかなかった。

結局、私を黒く染めたのだ。

夜よりも暗く、夜よりも美しく、夜よりも綺麗な色へと――――。

私は落としてしまったハサミを拾って、さっきよりも強る握る。

それは、彼女達をこの手で殺すため…。

自転車に乗って、のうのうとこっちに向かってくる女子高生を殺すためだった。

悪魔は染める（後書き）

次回からは、グロくなります。

しかしながら、文才がない故、そうでもないかもしれません。

ハサミを片手に

自転車に乗っている2人の女子高生のうち、私から見て左の方の…。

私とすれ違う方の女の子の方に、私は目を付けた。

可愛さは、中の上。

特別に可愛いわけじゃない。

それでも、殺す対象としては十分だった。

だから、私はすれ違う瞬間に、タイヤの前輪部分を思いっきり蹴っ飛ばした。

蹴られた女は、隣の女を巻き込みながら、“ガシャン”という音と共に倒れ込む。

2人とも、「痛い」という声を上げるが、私には関係ない。

そして、自転車を蹴(ひだりがわの)られた女は「何すんのよ！？」「ほんと、最近の子は！！」とあきれ気味に言う。

私は嗤(わら)った。　ニヤリと――――。

だってあまりにも可笑しかったから、、、

そこで、私の手の中には煌めく刃が1つあった。

「何こいつ？キモチワルッ！！」　右側の女の子はそう言った。

けれど、そんなの私には関係ない。

だから、迷わず左の女の首にハサミを突き刺した。

“プシュッー！！！”　辺りに勢いよく血が降り注ぐ。

私の体にも、右の女の体にも血は降り注ぐ。

悪魔は何のためらいもなく、“殺し”を実行した。

迷わない精神…。それは、次の行動を起こすことを決める。

刺された女は何が言いたいのか、必死に口を動かしている。

だが、穴の開いた首から、“ヒューヒュー”と音が漏れるだけで、こちらには何も伝わらない。

右の女は、涙を浮かべていた。

それは、私の殺しへの恐怖からか、友達への恐怖なのかはわか

らないが、それは確かに浮かんでいた。

口からは、「キャーーーー」と、いかにも女の子らしい声が漏れる。

私は、そんな風に叫ぶ右の女に、じわじわと近づいて行く。

『あぁ、足を引きずりながら逃げる様が何とも言えない・・・』

しかし、怖くて足が、、、手がうまく動かせないのだろうか？

もつれるばかりで、全然逃げることができていない。

「アハハハハ！！！アハハ！！！！」　私は面白くって笑った。

そして、今度は右の女にハサミを大きく振りかざした。

無様な音と共に

女は覚悟を決めたのだろうか？

泣き叫ぶのをやめ、力強く目を閉じる。

“ブスッ”　っと右肩に、ハサミが突き刺さる鈍い音がした。

“ヴゥッ・・・”　何とも言えない音が、女の口から漏れる。

『あぁ、なんて可愛い声なの？』

そして、私はもう一度、天高く振りかざす。

さらに、もう一度。　さらに、もう一度――――――。

最後に“グシャ”と、肉が音をたてた。

それから、しばらく、私はその場に立ち尽くした。

所謂、放心状態というやつだ。

だが、そんな私の体に、雨が降り注ぎ始める。

まるで、私の体に付いてしまった血を洗い流すかのように。

『冷たい・・・』　私はそう思った。

でも、それがまた、気持ちよくもあった。

２つの死体から流れ出る血が、雨で薄まり道を一面赤く染める

…。

４月１９日のことである。

私は初めて、人を殺した。

地獄に堕ちるという事

４時半頃である。

私は家に着いた。

いや、戻ったというべきだろうか？

悪魔の生まれた場所に…。

黒くてわかりにくいが、血がベットリついたワンピース。

雨で薄まっているとはいえ、それでもまだ赤さがわかる。

これが、私の家の玄関を汚した。

だから、私はそのままお風呂に向かい、体を洗い流した。

初めて人を殺した感覚。

手の中に、未だにハサミがあるようで…。

決して、気持ちがいいと言えるものではなかった気がする。

でも、それでも、私は再び人を殺すだろう。

それは、おにぃちゃんと約束したから…。

約束を破るということは、嘘をつくということ。

昔、おにぃちゃんが言っていた。

「嘘をつくと、地獄に堕ちる」　って。

私は、地獄になんか堕ちたくない…。

怖いのも、痛いのも、苦しいのも嫌だ！！

私が人を殺すのは、ただ単に、おにぃちゃんと約束したからというだけではないかもしれない。

ただ、地獄というわけのわからないところに行くのが、怖いだけなのかもしれない。

ニュース速報

私は、“人殺し”という罪を洗い流すかのように、ゴシゴシとスポンジを擦(こす)りつけた。

罪が薄くなってきたと思えてきた頃、、、

ハサミという感覚が、私の手から無くなってきた頃、、、

私は体と髪を洗い流し、お風呂を出た。

4月という、決して寒くはない季節の中、私の体は少しだけ震えていた。

その体からは、モクモクと湯気だけが虚しく立ち上っていた。

5時37分、、、

私は体を拭いて、部屋に入った。

そして、まず始めにベッドに腰を掛け、それから、体を布団に包(くる)ませた。

正直、別に寒いわけではない。

ただ、心の中ではまだ、気持ち悪さが残っているから…。

時々、体が震えだすから…。

体が、、、心が落ち着いてきた頃、私は夕食を作った。

冷蔵庫にあったベーコンを焼いて、キャベツを切って、トマトのへたを取ったりして…。

私は皿に盛りつけた後に、テレビをつけた。

それは、６時４５分。

夕方のニュースが終わる頃だった。

だが、私が起こした事件は、ニュース速報という形で、画面上にテロップで流れた。

“●●市■■区▲▲町　路上にて、女子高生の変死体発見。”

と――――――。

慎重かつ大胆に

それから、しばらくの間、、、

と言っても、３週間程だが、私は人を殺さなかった。

女子高生や、可愛い子、綺麗な子に会うと、私は目を閉じた。

心の中で笑い続ける“あいつ”が怖い…。

いつ、どこで“私”という殻を破って出てくるのか？

――――全く想像できない。

私は自分が恐ろしかった。　私という名の悪魔が…。

しかし、今日は５月１４日。

ちょうど、おにぃちゃんが死んだ日の１０日前…。

だから、私は約束を守るために、、、

嘘をつかないようにするために、また人を殺すことを決意した。

だが、今は世間が、女子高生殺人について、《どんな人が殺したのか？》《次もやるのだろうか？》と気にしている頃、、、

迂闊には行動することはできない。

しかし、派手にやらないで、何の意味があるだろうか？

心のどこかで、そう思った私は、慎重かつ大胆に人を殺すことにした。

ショッピングセンター

カバンを持って外に出る私。

その理由は、もちろん人を殺すため。

私の持つカバンの中には、包丁と、充電式電動釘打ち機が入っている。

2つの殺人道具を入れて、大きく膨らんでいる私のカバン。

そして、そんな私が着ているのは、真っ黒に染まったワンピース。

私はそんな格好で、自転車に乗って街に向かった。

今日は金曜日…。

私の腕時計は、雨や血で濡れてしまったせいか、壊れてしまった。

だから、今は何時かわからない。

しかし、朝食を取ったのは9時半。

あれから、２時間程経っているだろうから、今は１１時半頃…。
そんな頃、私は街の中でも大き目のショッピングセンターに自転車を止め、かごに入れていたカバンを肩にかけた。

まず、中に入ってしたことは、《可愛い子を探す》ということ。
『あの人は？』　そう、心に尋ねてみる。
『違う・・・全然ダメ・・・』　それだけ言って黙る悪魔。
『じゃあ、あの人は？』　そうやって、別の人のことを聞いても返事がない。
少々可愛いくらいじゃあ、私の中の悪魔は満足なんてしない。
『じゃあ・・・？』　と、少し特殊？な人間にしてみようと、店の中を一周…。
『ダメだ・・・思っている感じの人がいないや・・・』　そう思い、もう一周ぐるりとする。
すると、『いた！！！』っと心が踊り始める。
『ついに・・・見つけたぁ！！！』

そう思い、私は心の中で『あの人は？』と言った。

すると、『いいよ！？　最高じゃん！！』と、悪魔は笑いながら言う。

だから、私は悪魔がＯＫを出した人に近づいた。

すると、私が近づいていることに気が付いたためか、荷物を載せたカートを止めて、こっちを向く女性。

それに合わせて、私は声をかける。

「あの・・・」　っと――――――。

ショッピングセンター（後書き）

次回は、ほたるの外伝になります。

ちなみに、それが終わると、再び愛理に戻り、
そのあとはさとる、愛理、また違う外伝、そして愛理、、、
ってな感じです。
宜しくお願いします（＾＾♪

旅立ちと過去の記憶（前書き）

ほたるの、過去編です。
章の名前通り、外伝です。

今より少し前の、さとるの家にピンポーン！！しに行く前の内容です。
それではどうぞ！！！

旅立ちと過去の記憶

３月９日、１４時頃、、、

１つ上の学年が、今年も学校から旅立った。

そう、今日は卒業式である。

私は去年の夏に、この学校に転入した。

よく知らない先輩を見送る私。

ただ、私はテニス部に入部したので、その関係の先輩だけは知っているが…。

しかし、その知らない先輩も、知っている先輩も、ほとんどの人が泣いている。

けれど、私はこの事がわからない。

なぜ泣くのだろうか？

また、高校に入ってから会えばいいのに…。

私は大好きな人と会えないというのに…。

大好きな人と、顔も合わせることができない、何とも言えないもどかしさ。

もし顔を合わせることが出来たら、彼は一体、どんな顔をするだろうか？

想像しただけでも、恐ろしくってたまらない。

だって、私が原因でした喧嘩で、こんな状況になったんだから…。

だから、私は今でも後悔している。

いいや、これから先も、後悔して生きていくのだろう。

私は今、友達と、、、

新しくできた友達と、「じゃあ、また！」と別れを交わした。

それは、卒業したテニス部の先輩とご飯を食べに行った後の話だった。

私の家と学校との真ん中ぐらいにある橋の上を歩いていると、川に映っている太陽がとても綺麗で、私は思わず空を仰ぐ。

すると、太陽の周りに、虹がかかっていた。

所謂、ハロと呼ばれるやつだ。

それから、私はそれをよく見るために橋の手すりにもたれかかって、もう一度空を仰ぐ。

《まだ虹はできている・・・雲の流れが速い・・・》

そう思っていると、私はふと、過去を思い出した。

『あぁ、私がさとると別れてから、半年も経つんだな・・・』

その間、私は何の行動もしていない。

私が起こした喧嘩だし、確かに謝ろうとも思った。

けれど、勇気が全然出てこなくって…。

結局、そんな毎日が続いて、今日という日になった。

前の中学も、今日が卒業式だけれど、さとるは今頃どうしているのだろうか？

私は、彼女だったわけではないが、今頃新しい女（ひと）といるのだろうか？

そんな私は、空が好きだ。

空を見上げると、小さい頃に、よく2人で遊んだことを思い出す。

太陽がキラキラ光る中で共に遊び、星がキラキラ輝く中で共に寝た、あの頃を、、、

今でも、時々、あの頃に戻りたいと思うことがある。

昔は、毎日が楽しかった。

それは、さとるがいたから、、、

大好きな人と一緒だったからなんだと思う。

そんなさとるは、今何をしていますか？

私と同じ空を見ていますか？

旅立ちと過去の記憶（後書き）

次回からは、再び愛理の活躍です。

優しい人

私は、ショッピングセンターで出会った女性に、「親とはぐれたので、家まで送っていってくれないか？」とお願いした。

すると、その人は「構わないわよ？」「ただ、買う物だけ買って来てもいいかな？」と、私と同じ目線にするために、しゃがみ込んで言う。

「ありがとうございます！！」

そうやって、私は思ってもないことを言い放ち、『この世にも、こんなに優しい人がいるんだなぁ』と感心してみた。

だが、私がそんなことを思っているのも知らず、女性は私を“いこいこ”してから、「よーし、ちゃんと付いてらっしゃい！！」と言い、私に手のひらを差し出す。

だから、私は女性の温かい手のひらを握って、一緒に付いて行くことになった。

他人からみれば、この光景は仲の良い親子にでも見えるのだろうか？

悪魔がなぜ“ＯＫ”を出したのかは、悪魔にしかわからない。

けれど、私が手を繋いでいる人のお腹には、子供がいる。

きっと、旦那さんもいい人なんだろう。

この人を見ていれば、そんなことまでわかってしまう気がする。

私の親もこんな人だったのだろか？

《そうだったら、いいなぁ》　そう、心が呟いた。

そんなことを考えていると、女の人は言った。

女：「そう言えば、まだ名前聞いていなかったわね・・・」

：「私の名前は、瞳(ひとみ)って言うんだけど、あなたのお名前は？」

私：「私の名前は、“あいり”っていうの！！」

そう言って、とりあえずニコニコとしてみる。

すると、瞳は後に続けた。

瞳：「あいり？」

：「変わった名前ね・・・？」

：「一体、どんな字を書くの？」

私：「うーんとね、、、愛(あい)の理(ことわり)で愛理(あいり)って書くの！！」

瞳：「愛の理かぁ・・・」

：「いい名前ねぇ・・・」

：「この子にも――――」

そう言って、瞳はお腹をさする。

私：「ん？」「どうかしたの？」

私は、そう尋ねてみた。

瞳：「いやっね・・・」

：「実は、この子の名前、まだ決まってないんだぁ」

：「だからね、その名前がいいよなぁって・・・そう思って・・・」

そう言って、瞳は私の目を見た。

私：「え？」

正直、そんなことを言われるとは思っていなかった。

だから、私は心の中であることを唱えながら言った。

私の名前

私：「別に、いいよ？」

：「せっかくだし、私の名前もらってよ！！！」

そうは言ったものだが、私は思う。

“可愛そうに、、、その子も、、、あなたも、、、”

だって、私があなたを殺すことは、もう既に決まったこと。

『それなのに、、、それなのにそんなことを、、、』

そう思っていたら、なんだか涙が溢れてきた。

瞳：「だい・・・じょうぶ？」

そうやって、瞳は私に話しかけて、それからしゃがみ込んで私

の涙を拭いた。

瞳：「ほら！どうしたかわからないけど、泣かないで！！」

私：「ごめんなさい・・・」

：「ただ、自分の名前を付けてくれることが嬉しくって・・・」

それは、私が少なからず思っていたことだったので、嘘ではなかった。

そんなことを思っていると、瞳は言った。

瞳：「そっか・・・」

：「嬉しかったのか・・・」

っと、私にヨシヨシしながら瞳は言い、それに言葉を付け足して言った。

瞳：「この子が産まれたら、お家まで見せに行くよ！」

：「次に会う時はいつなのかなぁ？？」

そういって、瞳はニコニコという表情を私に見せる。

そして、それからもう一度、瞳から差し出された手を私は握り、歩き始めた。

殺すタイミング

私達が車に到着すると、瞳さんは後部座席に荷物を置きながら言った。

瞳：「ごめんねぇーちっちゃな車で・・・」

：「でも、乗れば都よ！！ほら乗った乗った！！」

そんな感じで、私達は車に乗り込んで、駐車場を出た。

それから、瞳さんは私の家のことを聞いた。

瞳：「家は●●町だったわよね？」

私：「うん、そーだよ・・・」

そんな会話を交わした後、私は瞳を殺すタイミングを窺(うかが)った。

すると、手が“ピクッ”“ピクン”と反応を示す。

『殺したい・・・殺したい』　と、心もそれに共鳴して反応する。

すると、信号で車が止まった。

『そろそろ殺してしまおうか？』

そう思いながら、私はカバンの中の電動釘打ち機に手をかけた。

瞳：「そのカバンの中には何が入っているの？」

私：「えっと・・・」

『そんなの答えられるわけがない――――』

『このカバンの中には人殺しの道具があるなんて――――』

私は周りを見回した。

車から見えるところには誰もいない。

『仕方がない・・・ここで殺すか・・・？』

そして、私は決意した。

瞳を今ここで殺すということを――――――。

殺すタイミング（後書き）

だんだんとグロくなっていきますが、表現力がないので、わかりにくいかもしれません。
本当にすみません。

音と悲鳴と嗤い声

“ドシュッ！！”　っと、不気味な音が車内に轟く。

それから、“ギャーーー”という悲鳴が車の外にも響く。

ひとみ・・・これからは女と呼ぶことにでもしようか。

女の肩を長さ15センチの釘が貫き、シートにまで突き刺さる。

「えっ　なに・・・これ・・・？？」

女はそう言って、刺さった釘を抜こうとした。

けれども「ダメだ・・・抜けない・・・」と言い、私の方を見つめる。

「なんで・・・？どうして、こんなことを？」

半分泣きながら、そう私に伝える女。

私は嗤ってやった…。

「アハハ・・・アハハハハ・・・」っと――――――。

だが、女の体には、まだ左肩にしか釘が刺さっていない。

『片方だけだと、なんだか可愛そう・・・』

そう心が私に言うので、私は反対側も同じようにしてあげた。

“ドシュッ！！”

再び、肉を突き刺す音が、私の耳を劈(つんざ)く。

大きくなる悲鳴。

それに比例するかのように、大きくなる嗤い声。

『ダメだ・・・』

『こんなこと、思っちゃダメなのに・・・』

『思っちゃダメなのに、ついつい思っちゃうの・・・』

『あぁ、なんて楽しいの？』

『人殺しは、なんでこんなに楽しいの？』

今まで生きてきた中で、今という時間が一番楽しい。

それから4発、肘(ひじ)のあたりに、左右2発ずつ釘を打ち込む。

すると思ったのだ。

あぁ、だんだんと、女がシートに磔(はりつけ)になっていく…。

芸術、、、、この2文字しか、頭に浮かばない。

そんなことを思いながら、私はカバンの中から包丁を取り出した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1276u/

愛の言霊～THE STYX～

2011年11月28日00時01分発行